

『平中物語』の阿克・ヨノ阿克

— 付『枕草子』七九段の方違えの解釈 —

小林 賢章

〔要旨〕『平中物語』中の阿克・ヨノ阿克の用例が午前三時を意味することを確認した。一例アケユクはフケユクの間違いであることも指摘。方忌みは午前三時の段階にいる場所が問題になることも指摘。

〔キーワード〕 明く・夜の明く・方忌み

一

いままでに、散文・韻文にかかわらず平安時代の文献を読むとき、朝方の時間帯に使用される阿克（明く）・ヨノ阿克表現（夜が主語で阿克が述語として組み合わせられる表現。「夜明く」、「夜の明く」、「夜も明く」など）は日付変更時点になるこ

と、または、午前三時になることの意味で使用されることを述べてきた。それを『平中物語（一）』に適用しようとするものがある。

二

以下、順次用例を検討する。用例を提示する際、動詞阿克・ヨノ阿克に傍線を、時間表現に破線を付けて、本文理解の助けとする。

I 簀子すゐこに呼びよびすゑて、姉妹はなからどもなど、口々くちぐちをかしくいひけるに、よし、これもて心ざしは見せむとて、などかかるとる人目ひとめをばは、いかでかはしのぶべき、つつむことだになき身ならばこそあらめ。夜明よけぬれば、男おとこ帰かへりて、いひおこせた

り。

うちははし誓はぬそでを雨雲と降りし時雨は月に見え
けむ

などぞいひたる。

これは、本命の女性を含めた多くの女性との夜の出会いの場面である。こうした女性との夜の出会いでは暁の時間帯になると別れることは常識だった。「宵暁のうち忍びたまへる出で入り艶にしなしたまへる」(「真木柱」)や「むかしより、あかつき帰る事、恋のならひなれど、」(「拾遺愚草抄出聞書」)などの記述から男が女と別れる時間がわかる。暁は日付変更時点の後の時間帯だから、「夜明けぬれば」はその前の午前三時になる意味で使用されていると思われる。この場面でも、後朝の和歌の中に、「時雨は月に見えけむ」の表現も見られる。「夜明けぬれば」が、一般的な注釈書に見られるように、「夜が明けただで」(新編全集口語訳)と解釈するなら、その時には明るくなっているのだから、時雨を月の光で見ることがなからう。

Ⅱさて、この男、志賀寺にまうでて、二月に行ひけり。かか
るに、この男の局の前に、女ども立ちさまよひけり。かか
るに、この男、なほしも見で、「などかくはさまよひたま

ふ」といへば、「夜ふけにければ、局もなくてなむ、よる
べもなくてある」といへば、「さらば、ここにやは宿りた
まはぬ」といはせければ、「なにのよきこと」と、集り来
て、ただいささかなるものをへだててぞ、この男はをりけ
る。

さてものなどいふに、夜明けにけり。女ども、みないで
にければ、隠れるたるところに、この男、かくいひやる。

群鳥の騒ぎ立ちぬるこなたより雲の空をぞ見つつながむ
る〈略〉(七段)

これもⅠの用例と同じような男と女の浮いた出会いの場面である。

「夜ふけにければ」は夜中になってと口語訳すべき時間表現だった。夜中になっても寺院の中で宿泊場所が見つからない女性たちとはどんな人たちかと思われるが、ここでの論とは関係しない。

夜中になり、さらに、「さてものなどいふ」うちに、「夜明けにけり」となる。この時間の経過を考慮すると、この「夜明け」もⅠの話で見た通常の男女の暁の別れと考えられるのである。とすると、「夜明け」は通常の男女の別れの時間午前三時

と考えられないか。また、この七段の後半部分には、「また、こと局つぼねに、人いとあまた見ゆるを、えしのばで、いひやる。雪のかきくらし降る日にぞありける。」と文を継いで、おそらく同日の同じような話がもう一つ書かれる。その時、平中が送った歌は、「春山のあらしの風に朝まだき散りてまがふは花か雪かも」であった。雪降る庭を見ていると、雪はまるで花が散るように見えるというのである。花に先ほどまで逢っていた女性の姿は意識しているかも知れないが、目に見えているのは雪の降る様子だけである。

その時間は、「朝まだき」である。アサ・アシタ（朝）は午前三時以降をいう。アサ・アシタの始まり部分は暁の始まる時間と重なる。そのアサのまだきの時間帯に女性たちの姿を見ているのである。もし、この時間に夜が明けていて明るいのなら、「散りてまがふは花か雪かも」とはならず、視界にその女性たちをはつきりと捉え得たはずである。『平中物語』にはもう一つ『朝まだき』の用例が、三十六段の「朝まだき立つそらもなし白浪しろなみの返る間もなく返り来ぬべし」である。朝方女と別れる時間は「朝まだき立つそらもなし」と表現され、それは、「朝早く、お別れして出てくる心は乱れ」（新編全集口語訳）を

意味して使われている。詳しくはⅦの段で述べる。女と別れる時間はまだ暗いはずである。

Ⅱの話は、後続した話の前の時間と考えられる。「夜明けよあけにけり。女ども、みないでにければ、隠かくれるたるところに、この男、かくいひやる。」と後朝の文を送っていることも考慮すると、Ⅱの話中の「夜明けよあけにけり」もやはり午前三時になる意味ではなからうか。

Ⅲ〈略〉さて、暮れにき来たり。明けぬればあ帰りぬ。かの女の親族しぞく、男見つけてけり。さて、「おのが目に、これよりいでいぬるは」。女、「知らず。よにあらじ」、「よし、かうしあらば、このいでぬる男のもとにいきて問はむ」とぞいひける。ようあひいふなるにぞありける。さりければ、「そこにて問はむものぞ。けき、いでたまひつるを見てけり。もし、聞きて問はば、かう答へよ」とていひたる、
(九段)

この段は、女の親の了解を得ないで、男が女のもとに通っていて、それが露見する事態を描いている。男は女の家に出かけ、帰宅するのは暁であった。男が暁に帰ろうとするなら、アク時間帯はアカツキの前でなければならぬはずだ。私はアカ

ツキという時間帯の開始時間になる意味で動詞アクは使用されると述べてきた。この「明けぬれば」も午前三時を過ぎて、でも口語訳するところだ。

そのことは、この段の別の表現からも推測できる。破線部「けさ、いでたまひつるを見てけり。」の部分である。この男は「けさ」女の家を出たことが、言われている。「明けぬれば帰らぬ」の時間と「けさ、いでたまひつるを見てけり。」の時間は同じはずである。

ケサの開始時間と前段で扱ったアシタの開始時間は同じであった。さらに、一般に男が女の家から帰宅する時間であるアカツキの開始時間も前者と同じであった。

右のようなくどい説明を加えるなら、「明けぬれば」の動詞アクは午前三時になる意味になるのだった。

IV〈略〉この女、「いづちぞ」といひければ、男、「志賀へなむまうづる」といひければ、やがて、「さはもろともに。ここにもさなむ」とて、いきける。さりとして、うれしきこと」とて、もろともにまうでて、寺にまうで着きても、男の局つばねの局つばね女つばねの局つばね近くなむしたりける。かくて、物語ものがたりなどあまた、をかきさやうにかたみにいひければ、をかしと思

ふ。この男、まうでたる所より、寺ぞふたがりける。(1)明くるまで、えあるまじかりければ、たがふべきところにくきけり。「命惜しきことも、ただ行先ゆきさきのためなり」といひて、いきければ、女どもも、なほあるよりのさうごうしくて、「さらば、「いかがせむ。「京にてだにとぶらへ」とて、内裏うちわたりに宮仕みやつかへしける人々なれば、曹司ざうしも、使ひける人々の名なども問ひけり。この男、うちつけながらも、立つこと惜しかりければ、かうぞ、

立ちてゆくゆくへも知らずかくのみぞ通の空にてまどふべらなる

女、返し、

かくのみしゆくへまどはばわが魂たまをたぐへてやせまし
道のしるべに

また、返しせむとするほどに、「男女をとこをんなの供ともなる者ども、(2)「夜明けぬべし」といひければ、立ちとどまらで、この男、浜辺はまべの方に、人の家に入りけり。
さて朝あしたに、車くるまに、あはむとて、綱引あみかせなどしけるに、知れる人、逍遙せうようせむとて、呼びければ、そちぞこの男はいにける。(略) (二十五段)

この話は、「方ふたがり（方忌）」と関係する話である。傍線部(1)「明くるまで」前後の文章を読んでいくと、「まうでたる所（自分の家か）」から今女と話している寺のある場所が方ふたがりになっているから、「明くるまで」この寺に居ることができないと言っていることがわかる。ただ、このことは逆に言うとき、「明くるまで」この寺に居なければ、禁忌を犯したことはないと言われている。

次に傍線部(2)「夜明けぬべし」は男と女の供の者たちが男に言っていることがわかるが、これも後ろの「立ちとどまらで、この男、浜辺の方に、人の家に入りこけり。」という文を考えれば、「夜明けぬべし」は夜が明けそうだと夜があけるまでこの場所にはならないと言っていることになる。

まず確認したいことは、「明くるまで」と「夜明けぬべし」とは同じ時間を表現していると考えられる。

ここで、方忌みと時間の関係を検討してみよう。この話では、まず、男（平中）の自宅（？）から寺の方向が方忌みになっていることが語られていた。傍線(1)の所で「明くるまで、え

あるまじかりければ」と言っているが、その言っている時点（もちろん、「明く」時点より前の時間）では、男は方忌みの禁を犯しているのだろうか。そうとは考えられない。「明くるまで」そこに居ると禁をおかしたことになるが、今の段階では禁をおかしてはいないと言っているのである。方忌みは方向で規定される。ただ、方向だけではなく、時間にも規定されると考えられるのである。

「明くるまで」また同じ時間「夜明け」までここにいると、方ふたがりとなるが、午前三時の時点でここにいなければ、方ふたがりにあたらないと言っているのである。「明く」、「夜明け」の時間が午前三時になると述べたが、従前の私の研究がそのことを指摘していたし、方ふたがり日付に關係していることは、次節で検討する「枕草子」（七九段）では「今宵方のふたがりければ」では、「こよひ」（その終了時点は午前三時）という時間と關係した表現が方ふたがりの場面で使用されることから、その事実がわかる。

この女性は、翌朝「朝」網引きを見ている。アシタの開始時間は午前三時だった。その開始時間から、おそらくそう遠くない時点で浜辺に出ていることがわかる。

今一つ時間に関連して、当時寺院にお参りした人はアカツキの鐘（午前三時に鳴る）とともに、寺院を後にすることが多い。女性の退院時間、朝の開始時間などを考慮に入れるとき、この「明くるまで」と「夜明けぬべし」も午前三時になる意味になるのだった。

Vまた、男、しのびて知れる人ありけり。人しげきところなれば、夜も明けぬ先に、人の静まれるをりにとて、帰りにてたるに、まだ暗きほどなれば、いかで帰らむと思へど、いとかたかりけれど、門の前に渡したる橋の上に立ちて、いひ入る。

夜半に出でて渡りぞかぬる涙川淵とながれて深く見

ゆれば

と、いひ入れたれば、女も寝でぞ起きたりける。返し、

さ夜中におくれてわぶる涙こそ君がわたりの淵となる

らめ

男、いとあはれと思ひて、またものいひ入れむと思へど、大路に人などありければ、立てらで、帰りにけり。（二十

六段）

傍線部「夜も明けぬ先に」が検討の対象となる。この話も男

が女の所へ出かけているのだが、それは、「しのびて知れる人ありけり」とあるから、交際が認められない男女の仲であった。この男が、「夜も明けぬ先に」帰ろうとした理由もそこにある。「人が静まれるをりに」帰ったかつたのである。

通常、男は女の家をアカツキに退出している。午前三時以降の時間である。当時の男女の交際はこの話の男と女に限るわけではない。当然、午前三時をすぎれば（アカツキになると）、道路には女の所から帰る男たちが大勢いたはずである。それに、当時の一般の人々の生活時間は午前三時からであったことは、「夕顔」の巻で描かれる近所の人々の描写から想像される。

すると、男は午前三時より前に帰宅したろうとは予想されるのである。後ろの男と女の二首の歌がそのことを書いている。男は「門の前に渡したる橋の上に立ちて」、「夜半に出でて渡りぞかぬる涙川」と歌を詠んでいる。男は女の家の前で、出て直ぐの時間に、「夜半」だと歌に言っていることになる。それに対して、女の方は、「さ夜中におくれてわぶる涙こそ君がわたりの淵となるらめ」と男が女の家を出た（おくれてわぶる）のが「さ夜中」だといっている。

ヨハとヨナカについては、ともに午後十一時から翌日の午前
三時までの時間帯を指す語だと指摘したことがある⁽³⁾。ヨハ
とヨナカ（正確には「サヨナカ」）が使用されている歌が贈答
歌であることを考えると、男が女の家から帰った時間と女が置
いて行かれた時間はほぼ同じと考えるのが普通だろうから、こ
こでのヨハとヨナカの時間は同じである。と考えられる。むし
ろ、このような用例が、ヨハとヨナカが午後十一時から翌午前
三時までを言っている根拠にさえなるのである。

ヨハ・ヨナカの終了時間は午前三時だった。その終了の少し
前の時間をヨノアク表現で、「夜も明けぬ先に」とここに書か
れているのだった。

「夜も明け^あ」はヨハ・ヨナカの終了時点、午前三時になる意
味だったのである。

VI〈略〉集りて、いひすきびて、夜明け^よにければ、帰りにけ
り。朝^{あした}に文どもやるとて、〈略〉（二十九段）

この段の話は、男女一対一の夜の場面ではなく、二対二の交
際を描いた滑稽談である。普通の恋愛話とは違い、最期には一
人の男と多くの女性が話をしあう場面が描かれる。そうした場
面の最期の部分に引用本文は続いている。男女が一対一の普通

の恋愛場面とは違うが、ここも、普通の男女の別れの場面と同
じ時間と考えていいのだろう。すると、「夜明けにければ」は
午前三時になる意味となる。後ろに、「朝^{あした}」の語があることが、
「夜明け」の意味に限定を与えることはここまで述べてきたこ
ととおなじである。

VII〈略〉さいふほどに、(1)暗^{くら}うなりにけり。「なほ、ここに
立ち寄れかし」といひければ、おぼつかなく、尋ねわびつ
ることを、よろづにいひかたらひけるに、(2)明け^あゆけは、
いつはり病^びみして、とどまりなまほしかりけれど、あやし
く、親に從へる人にて、夜^よの間、ほかなるをだに、かかる
旅にあることと思ひて、かつは嘆きつつぞ、人ともいひ
つつ、いかでかとどまるべきと、心に思ひて、明け^あけれ
ば、「たち返り、かならずまゐり来^きなむ。此度^{こたび}待ちて、心
ざしはありなし見たまへ」とて、親の宿れる南へいぬ。さ
てやる。

(3)朝^{あした}まだき立つそらもなし白浪の返る間^まも亡く返り来^きぬ
べし〈略〉（三十六段）

右のVII段では、傍線部「明けければ」と破線部(3)「朝まだ
き」の関係は今までに述べてきたことと同様で、「朝まだき」

に手紙を送ろうとすると、「明けければ」は午前三時になる意味であることに問題はない。ただ、破線部(2)「明けゆけば」の存在が問題となる。

本稿と直接関係はしないが、次のような問題が生じる。複合動詞「明けゆく」はアカツキの時間帯が経過する意味で使用される。破線部(2)「明けゆけば」を意識するなら、「アカツキの時間帯が経過する」と口語訳できるのである。傍線部「明けければ」も意識すると「晝になると」の意味になる。同じ時間が二回記述されるのである。

この問題の処理はできないのだが、こんな私見を提案しておく。この段落のはじまりに、

破線部(1)「暗うなりにけり。」とあることがヒントになるのではないか。「暗うなりにけり。」の時間から、破線部(2)「明けゆけば」の時間までは、どのくらいの時間が経過しているのだろうか。この段の季節はわからないが、「暗うなりにけり」の時間を午後七時と仮定すると、午前三時以降を示す「明けゆけば」の時間までは、八時間が経過していることになる。そして、その時間が本文では、「なほ、ここに立ち寄れかし」といひければ、おぼつかなく、尋ねわびつることを、よろづにいひ

かたらひけるに」という文で表現されているのである。右の文章が八時間を経過していると捉えるのは無理があるのではなからうか。

しかも、この部分は(2)「明けゆけば」の時間から、「いつわりして、とどまりなまほしかりけれど、あやしく、親に従へる人にて、夜の間、ほかなるをだに、かかる旅にあることと思ひて、かつは嘆きつつぞ、人ともいひつつ、いかでかどまるべきと、心に思ひて」の文章が続き、さらに、「明けにければ」に続く。

ここで問題となるのは、「明けゆけば」の開始時間と「明けにければ」の時間は同じ時間だと言うことである。ある時間が提示され、同じ時間が再掲されることは古典作品ではないわけではないが、もしここがそういった表現なら、アケユクとアクとを逆にする方がふさわしいはずである。右引用した文章のうち本文理解に役に立つと思うのは、「夜の間、ほかなるをだに、かかるたびにあることと思ひて」の文である。「夜の間の夜」の終了時点は午前三時だった。「明け」と、この男は親の泊まっている家に戻っているから、この場面「夜の間、ほか」にいたのである。

結論を述べよう。この「明けゆけば」は「ふけゆけば」の間違ひではなからうか。「あけゆく」と「ふけゆく」とでは、「あ」と「ふ」の違いだけである。複合動詞フケユクはヨナカ・ヨハの時間（午後十一時～翌午前三時）を経過する意味で使用される。(2)「明けゆけば」が「ふけゆけば」だとすると、「ヨナカ（午後十一時～翌午前三時）も経過して」が口語訳となる提案である。そう考えると、傍線部の「明けければ（午前三時になると）」との接続も時系列的に理解できるのであった。

『平中物語』の伝本は一冊だけである。従つて、校合作業も行えない。誤字説を提出する所以である。

以上で『平中物語』中の、動詞アクとヨノアク表現の9例中8例を検討した。その結論として、アク・ヨノアクは午前三時になる意味でよいことがわかった。

残りの一例は「さて、この男、ときどきいくところありけるに、ほのぼのと明るるほどにぞ、帰りける。」(三十三段)の用例が残された。現在私見では、このホノボトアクという用例は、ここで扱った用例とは異なり、わずかに夜が明けることと解するのがよいとかがえる。

三

右の検討で、『平中物語』中の動詞アクの検討は済んだ。そのうちIVの文章では、「方ふたがり」と関係する動詞アクを検討した。その際思いだされたのが、『枕草子』七九段の次の文章だった。

返る年の二月廿余日、宮の、職へ出でさせたまひし御供に
まゐらで、梅壺に残りたるたりしましたの日、頭中将の御消息
とて、「昨日の夜、鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがり
ければ、方違へになむ行く。まだ明けざらむに、帰りぬ
べし。かならず言ふべき事あり。いたうたかかせで待て」
とのたまへりしかど、「局に一人はなどてあるぞ。ここに
寝よ」と、御匣殿の召したれば、まゐりぬ。

右の有名な段が検討箇所である。そのうち、傍線部分の解釈を問題とする。

まず、「鞍馬に詣でたりしに、今宵方のふたがりければ」とある。鞍馬からどこが方ふたがりであったのだろう。このことについては、『枕草子解環』^⑤が詳しい注釈をしているのでそ

れにしよう。まず、斉信（頭中将）から手紙が来た日を、「二月二十六日」と注釈した上、「かたのふたがりければ」に次のような注を付けている。

「大將軍・王相神・太白神・天一神・土公・金神・八卦といった凶神のある方角に向かつて行動することを慎むのを方忌という。この時はおそらく、二十三日から六日間、天一神が南方に遊行するので、斉信は、鞍馬寺からほぼ正南に当たる内裏へ帰ることを避けて、いったん西の方へ行き、角度を変えて（方違え）、内裏に帰参したのであろう。」とある。鞍馬から方ふたがりの地は内裏であるとしている。萩谷の説明によると斉信の手紙が清少納言の許に到着した日の二日後まで方忌みになる。この方忌みは手紙の到着した日の二日後まで方忌みになる。方忌みの根拠が天一神の遊行の方向との説は、この日が二月二十六日の説とあわせてやや疑問が残る。が、『新編全集』でも「鞍馬から内裏の方角が禁忌にあたっているの。」と頭注に書いている。『解環』のように、その理由は詳しく書いてないが、鞍馬から御所の方向が方忌みとなっている考えには同意であることはまちがいない。いや、『枕草子』の諸注釈書はほぼ同意の注釈をつけている。

それでは、『解環』の注釈は正しいのであろうか。『解環』には、「斉信は、鞍馬寺からほぼ正南に当たる内裏へ帰ることを避けて、いったん西の方へ行き、角度を変えて（方違え）、内裏に帰参したのであろう。」とあった。日付が変わらないうちに、いったん別の方角の土地に出かけたとしても、その日のうちに方忌みの土地に着き、その夜を明かせば、それは禁忌を犯したことになる。この事実は先にIVの話でも見たし、ベルナーク・フランクの『方忌みと方違え』^⑥の中で、「方違えの場所から目的地へ向かったり、自宅に還ったりしたのは「暁」鐘之後」「鶏鳴之後」である。「寅刻」（午前三時—五時）「卯刻」（五時—七時）と正確に述べている例もいくつかある」（第四章 方違え）と述べていることからわかる。「鶏鳴」だけは、午前一時の可能性があるが（午前三時の説もある）、その他「暁」「寅刻」などは日付が変わって、帰宅したり、目的地に向かっているのだった。ベルナーク・フランクは方違えした人が、時間がひどく経過してから帰っているとの事実コメントしているが、それは正確さを欠いている。日付が変われば、方ふたがりは消えるから、「暁」や「寅刻」に目的地に向かったのだった。この事実が『平中物語』IVの話柄にもみえ

たのだった。

それに、『枕草子』七九段ではもう一つ重要な事実があった。当該部分の後、『枕草子』には、「久しう寝起きておりたれば、『夜べいみじう人のたたかせたまひし。〈略〉」と清少納言の留守を守った女房から清少納言は報告を受けている。この「夜べ」は斉信が「今宵方こよものふたがりければ」と言ったその夜のことであった。そして、その時間は斉信の「かならず言ふべき事あり。いたうたたかせで待て」の発言の時間だったはずである。

斉信は方ふたがりの日の夜に、清少納言を訪れた。ところが、清少納言は御匣殿の所に出かけて留守だったという状況だったと判断がつく。となると、『枕草子』の本文の斉信の発言はどう読んだらいいのだろうか。私に口語訳してみると、「昨日の夜、鞍馬に参詣した。今日は（鞍馬から御所の方角は）方ふたがりになっている。だから、（今夜のうちに、どこかへ）方違えに行かねばならない。まだ日付が変わらないうちに、お前の所から（自宅（？）に）帰る事にする。必ず言わねばならないことがある。ひどく叩かせて（時間を取らせない用心をし

て）、まっついていてください」となる。斉信は、その晩清少納言と話をした後、どこかに方違えに行く計画だったのである。

斉信が清少納言に会った後どこかに出かけるつもりなら、斉信が方ふたがりの夜、清少納言の留守をした梅壺に斉信がやってきて、戸をひどく叩いたことも納得がいく。方ふたがりに禁忌を避けようとしていたこともわかるのだった。

「まだ明けざらむに、帰りぬべし」（『枕草子』七九段）の「明け」も方忌みの明ける午前三時になる意味だった。午前三時より前に、「帰りぬべし（帰るつもりだ）」となる。鞍馬から方ふたがっている清少納言の居所（御所）へ斉信が出かけるだけでは、方ふたがりにはならない。ただ、その晩の終了時点午前三時までそのところにいると方ふたがりの禁忌を犯したことになる。

斉信の発言で言うなら、「まだ明けざらむに、かえりぬべし。」の目的地が梅壺であつてはならないのである。

四

本稿では、『平中物語』中のアク・ヨノアクを検討し、午前
三時になる意味であったことを述べた。その過程、例えば、IV
の検討では、アクとヨノアクが同じ時間を表現していることも
述べた。アク・ヨノアクが日付変更の意味であるとわかると、
今まで意味がわからなかった『枕草子』の方たがえ記事の正し
い読みも指摘できた。

本稿の主目的は、通常の古典文学作品と同じように、『平中
物語』中のアク・ヨノアクが午前三時になる意味でないと、本
文の理解に矛盾が生じることを指摘することだった。

〔注〕

- (1) 『平中物語』本文は、『新編日本古典文学全集』によった。
また、語彙検索は、曾田文雄著『平中物語』研究と索
引(一九八五年 溪水社)によった。
- (2) 石川常彦編著『拾遺愚草古注(上)』(一九八三年 三弥
井書店)

(3) 拙稿「アケハツ考」(『同志社女子大学学術年報』64 二
〇一三年)など

(4) 拙稿「『源氏物語』のヨモスガラ」(『同志社女子大学学術
年報』57 二〇〇六年)

(5) 萩谷朴編著『枕草子解環二』(一九八二年 同朋舎)

(6) ベルナル・フランク著 斎藤広信訳「方忌みと方違え」
(一九八九年 岩波書店)